

現 地 通 信

パシルマスから

坪 内 良 博*

1. マラヤ農村総合調査計画

京都大学東南アジア研究センターとマラヤ大学経済学部とのジョイント・プロジェクトに従事してマレーシアでの1年が過ぎようとしている。北西部のケダー州、西海岸のマラッカ州、東海岸のクランタン州の農村において、口羽益生（竜谷大学文学部）、前田成文（センター）、および筆者がそれぞれ長期にわたる社会・経済調査を行ない、かんがい、稲作、土壌、医療の研究者がそれぞれの地域を巡回して、専門的な立場から調査を行なうと同時に上記の3人にアドバイスを与えるというのが本調査計画のあらましである。

口羽氏のケダー調査は1969年にいちおう終了、前田氏のマラッカ調査は数カ月前に着手されたばかりである。3人の調査時期には多少のずれを余儀なくされたが、それでもこの8月には全員がクアラルンプールで顔をあわせることができた。川口桂三郎（京都大学農学部・リーダー）、富士岡義一（京都大学農学部・かんがい）、西尾敏彦（農林省・稲作）、

古川久雄（京都大学農学部・土壌）、滝沢英夫（京都大学医学部・医療）が自然科学系のメンバーである。西尾氏の調査だけが別の機会に行なわれるが、あとの調査者はクランタン、ケダー、マラッカの順にほぼ順調に巡回を終えようとしている。筆者自身もクランタンを離れる時期が近づいて、何となくあわただしい毎日である。

2. クランタン州

クランタンを発つ前に、筆者が1年を過ごした当地の状況をお伝えしよう。学術的な調査結果は帰国後順次報告するとして、これは思いつくままの印象記であることをおことわりしておく。

クランタン州はマラヤ東海岸に位置し、タイ領に接している。かつてはタイ国王に貢納していた土侯国であった。クランタン川河口部の平野にゴム園をまじえながら稲作地帯が広がり、ここに人口が集中している。この川をさかのぼると次第に土地の起伏がはげしくなり、ゴム園の割合が増加し、やがては広大なジャングルへと入っていく。人口総数680,626（1970年センサス）、多くの中国系の住民を含む西海岸の諸州と異なり、マレー人の割合が大きいのが人口構成の特色である。クアラルンプールから州首都コタバル（人口約5万5千）までは毎日2便の飛行機（ただし1便はペナン経由）と、ジャングルを通りぬけて週3便の郵便列車が通っている。また海岸沿いにクアラトレンガス、クアンタンを経て約400マイルの舗装道路がある。

西海岸から隔離され、連邦政府に対する野党であるイスラム政党（Partai Islam）が主力を占めているこの州では、開発計画もやや遅れ気味であり、マレーシアとしては後進地

* 京都大学東南アジア研究センター

域に属する。とはいえ、近年、クムプ計画をはじめ、いくつかのかんがい計画が実施され、クランタン川からポンプで水をあげることによって二期作地域がかなり増加して来たり、また州独自の開発計画にしたがってジャングルの開墾も行なわれている。

3. パシルマス

クランタン州は行政的には八つの郡 (jajahan) に分かれる。パシルマスはパシルマス郡 (人口約10万) の郡役所所在地で人口1万余りの小さな町である。クランタン川の左岸に位置し、コタバルからは10余マイル離れている。コタバルと対岸のパシルマスやトンパットを結ぶ長いコンクリート橋は、1964年に州政府によって架けられたもので、州政府独自の実行力のシンボルとなっている。

農産物、魚、肉などの食品を中心として扱う市場のまわりを、中国系、インド系、マレー系の商店がとり囲み町が形成されている。町の周辺に郡役所、郵便局、病院、保健所などをはじめ政府の諸機関や二つの映画館などがある。

市場でのマレー人女性の活動は、西海岸では見られない現象である。中年の婦人が多いが、彼女達は朝早くから輪タクを連ねて周辺のカンボン (村) から市場へとむかう。

4. 調査村ガロ

筆者の調査地ガロ村 (Kampong Galok) は、パシルマスの町からクランタン川に沿って9マイルほど離れている。道路に沿って約1マイルにわたって細長く連なる150戸たらずのマレー人の村である。クランタン川からは約 $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{2}$ マイル離れている。ルマル、パシルマスなどのかんがい計画がこの郡の中にあるが、この地域はこれらのかんがい計画よりも上流部に位置し、全くの天水に依存している。二期作地帯の調査はすでに政府の手などで行な

われているので、より伝統的な単作地帯としてこの地を調査対象に選んだのである。このあたりまで来ると土地の起伏が若干大きくなり、詳細に観察すれば一枚一枚の田に高低があることが分かる。安定した二期作地帯とくらべると、家の構えの貧しさが目立つ。

村の名前は、昔そこにあった Kubang Galok という沼たく地に由来するという。村の歴史は明確ではない。クランタン川により近いアタスブティン (Atas Beting) やジャボ (Jabo) などの隣村は100年に近い歴史をもつといわれ、川からより離れたパダンハンガス (Padang Hangu) は55年ほど前に開墾されたという。ガロ近辺はどうやら80年前後にひらかれたらしい。

5. 土地所有

ごく最近にタバコ栽培が導入されるまで、この村の主な生業は水稻耕作とゴムのタッピングであった。いずれも1~2エーカーという小さな経営規模の下にいとまわれている。土地所有の規模もまた同様に小さい。

マレーシアのいずれの地方でもみられるように、ひとたび開墾された後、土地はイスラム法あるいは慣習法によって細分されながら子孫に伝えられる。新しい開墾地への移動が順調に行なわれたり、都市への人口吸収が行なわれない限り、現在の激しい人口増加の下では、土地の細分化と経営の零細化は不可避免なのである。この村ではイスラム法よりも慣習的な均分相続が優勢であるが、息子が一人だけで他に娘が何人かいる場合に男子のとり分がやや多くなったりすることもある。

農地と同様、屋敷地も相続の対象となるが、きょうだいのうち誰が残り誰が出ていくかはそのときの状況に依存し、結婚後の夫妻の財の所有状態からかなり正確に説明できる。こうしていつとはなしに親子、きょうだい近隣関係が成立する。

財の所有は個人にかかわる問題であり、親子間やきょうだい間での貸借や売買が、親戚や他人からの貸借・売買と並んでかなりひんぱんに現われる。

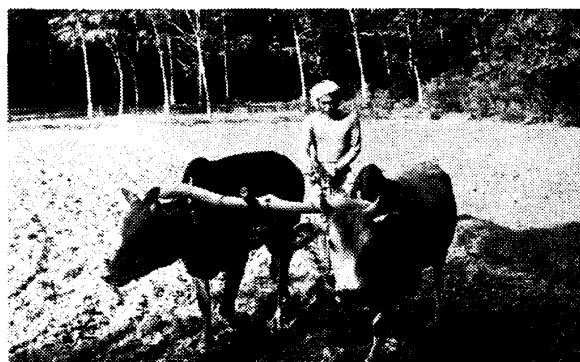
小作はパワ（pawah）とよばれる制度が一般的である。収穫の2分の1を地主がとり他の2分の1を小作がとるのが基本的な形態であって、条件に応じて多少の変容が加えられる。例えば、パシルマスの町の近くでは、肥料代折半、刈りとりは地主が小作を現金で雇い、運搬はそれぞれ自分で行なうという形をとったパワがみられたりする。この村ではすべての作業を小作が無料で行なう。

パワの制度は水田のみならずゴム園や家畜についてもみられる。ゴム園では日々の収益が、家畜の場合には生まれた仔が分配の対象となる。物納あるいは金納の形をとって一定の小作料を納めるセワ（sewa）の制度は、西海岸ではかなり一般的であるが、ここでは町の近くでたまにみられるだけである。

6. 水稻、ゴム、その他の生業

二期作地帯では米が商品作物であるのに対し、ここでは水稻は自家消費のためにつくられる。天水に依存するため、雨がうまく降らない年は収穫がほとんどない場合もある。今年の収穫はまずまずであったが、昨年度は水がなくきわめてわずかの収穫しか得られなかった。二期作地帯では bahagia などの新品種が用いられるが、ここでは intan belian, padi piah などとよばれる在来種が、水田の条件にしたがって用いられる。

荒おこしは水牛または牛を用いて男が行ない、苗代から苗をひきぬいてたばねる作業は女が、そして田植えは男女ともに行なう。ケダーでは男女の分業がよりはっきりしており、田植えは女だけの仕事であるが、この村では多くの男が田植えに従事している姿がみられる。収穫は女が刈りとり、男が脱こくをする。



田の荒おこし



脱 穀

風選は主に女の仕事である。収穫を除くそれぞれの作業は世帯ごとに行なわれ、集団的な様相がたまに現われるのは刈取りのときだけである。

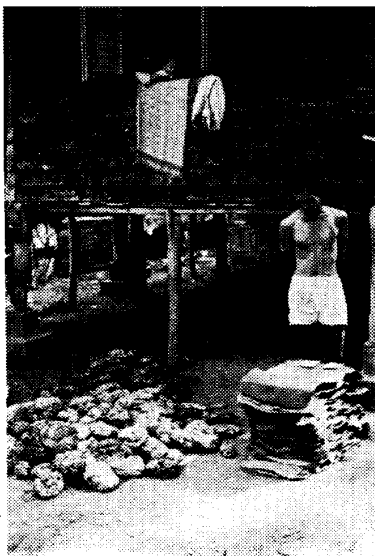
もみ米は baloh とよばれる穀倉におさめて保存される。大部分の農家にとってその量は自家用にさえも不十分であり、たとえ余ることがあっても、翌年度の不作を考えてめったに売られることはない。

ゴムのタッピングはかつては非常に有利な現金収入源であった。不幸なことに現在ではゴムの価格が低迷しており、その上村のゴムはプランテーションに比して手入れも処理方法も劣るので、1エーカーからの収益は1日あたり M\$1 (M\$3 ÷ US\$1) をやや上回るに

過ぎない。しかも雨が降ればタッピングできず、年の半分がタッピング可能となるに過ぎない。タッピングには男も従事するが、どちらかというと女のほうが多い。暗いうちから作業をはじめる大規模なプランテーションとは異なり、朝7時頃から仕事を始めて午前中にはゴムのシートが完成する。スモーキングもほどこさぬ低級のゴムが生産され、これをまとめて隣村のライセンスをもつ商店または毎日のように村をまわってくる仲買人に売るのである。



タッピング



ゴムの仲買人



やしの液を集める penyadat



やし糖をつくる

稲作とゴムの外にココヤシの木に登って、竹筒を使って芽から出てくる液を集め、これを煮つめてマニサンとよばれる一種の砂糖をつくる者（penyadat）も若干いる。

果樹園をもつ者や屋敷地の中に果樹を有する者もあって、ドリアン、ドックなどが彼らに収入をもたらす場合もある。しかし、果樹もまた気まぐれでときには全く実を結ばぬことがある。

村人を相手に商店やコーヒーショップを営む者もいる。コーヒーショップのうち2

軒はいずれも離婚した婦人がひらいており、多くの男達を集めている。これもケダーあたりでは見ることでできない風景である。

村内での生業は土地の狭さに加えて収量の不安定性のために村人の生活を保障するわけにはいかなかった。かくして男達は収穫期の差を利用して西海岸のケダーへ刈取り作業に行ったり、クランタン川上流部(Ulu Kelantan)、パハン州、さらにはタイ領のゴム園でバワ制度の下に雇われたりした。

7. タバコ栽培の導入

Malayan Tobacco Company (M.T.C) がこの村の中にステーションを開設したのは1968年のことであった。筆者がこの年にはじめてこの村をおとずれたとき、ちょうどレンガづくりの乾燥用のバーンが完成したところであった。10数カ所に開設された M.T.C のステーションを中心としていとなまれるタバコ栽培は、クランタンの水稲単作農村の姿をかなり大きくかえた。この村も例外ではない。

葉タバコの耕作は、乾期における水田を利用して行なわれる。昨年までは1世帯あたり1000本の苗の植付けが許可されていたが、今年からは制限が緩和され、しかも三つに分けられた植えつけ時期のうち一期と三期とがこの村に割当てられるようになった。さらに今年から他の会社の系列のタバコ乾燥ステーションが隣村を含め若干の地域で操業をはじめたので、タバコ耕作の村人の生活に及ぼす影響はますます大きくなった。

タバコ耕作は労働をはげしく要求するが、単位面積あたりの収益はかなり大きく、順調にいけば1000本の苗が植えつけられるクエーカーあたり M\$ 250 を得ることができる。

今やこの村はタバコ栽培村と呼んでもいいくらいになってしまった。一家をあげて栽培に従事するほか、ほとんどの娘達は約4カ月のシーズン中ステーションの労働者として雇



タバコステーションにて

われている。ガロのステーションだけでも約750人の娘を近くの村から雇っている。

かつては土地不足のために村外に生活の場所を求めざるを得なかった若者達は、わずか数カ月のタバコ栽培のために村から出なくなったし、ゴム園地域で働いていた若夫婦がシーズン中だけ親の家に戻ってタバコを耕作したりしている。耕作が忙しい間はゴムをタップする者もなく、小規模なゴム園はしばしば放置されたままとなる。重労働であるマニサン(やし糖)づくりをやめてタバコ栽培に専念する者もできた。各地への出稼ぎもずっと少なくなった。

タバコシーズン中には、M.T.C のステーションの前に布地、肉、魚などを商う者が屋台店をつらねる。多くは町からやって来た商売人だが、村の青年の中にも魚を売ったり、さとうきびからしぼったジュースを売る者がある。

タバコによる現金収入は初等中学への進学をも容易にしたように思われる。約4マイル離れたカンコンという村に小学校の校舎を借りて初等中学校が発足したのは1965年1月のことであったが、現在ではほとんどの小学校卒業者が進学するようになっている。距離の近さのために通学が容易になったことも一つの理由であるが、やはり経済的な裏付けも無視することができない。教科書代や通学費にかなりの金額を要するからである。通学用の

自転車もずい分増えた。

他方、逆の変化はポンド (pondok) とよばれる村の寄宿宗教塾におこった。以前は多くの少年達がそれぞれ小さな小屋に寝起きして、To'guru とよばれる比較的年とった先生のもとで塾的な生活をおくったものであるが、学校生活の普及とともに彼らが姿を消していくのである。村に接して一つのポンドがあるが、現在そこに生活するのは大部分が老女であり、養老院の観を呈している。少年の数はわずか4人に過ぎなくなった。

タバコ栽培は村に大きな変化を及ぼした。しかし、これは充分な経済生活を保障する変化ではない。タバコ栽培もまた天水に依存するところが大きく、例えば昨年度の収穫はかなりの農家にとって絶望的なものであった。またタバコ栽培のために村にとどまる者の中には、他の時期をほとんど無職の状態で暮らしている場合がある。このような意味でなお開発の谷間からぬけ出すことがむずかしいといえる。

8. 調 査

村の生活は経済だけをとってみても以上のように多面的であり、また変化に富んでいる。以上の記述は実際には必要以上に簡略化しているのであって、詳しい叙述と分析はいずれ帰国後に行なうことになる。家族集団や親子近隣の問題、財産分割後の土地売買や貸借の問題、ポンドの生活やメッカ巡礼の問題など、より深部のマレー人的な生活の構造がこれらの経済活動と深く結びついている。そして残念ながらここにはこれらを十分に伝える時間の余裕もなければ、紙面も限られている。

今回の調査資料の大部分は村人とのインタ

ビューを通して集められた。インタビューは一軒あたり約3回におよんだ。クランタンの村人達は概して素朴で、プライバシーをおかすような質問にも割とよどみなく答えてくれた。とはいえ、すべての問題について一々実に具体的にたずねなければ大ざっぱな解答となるので、何が重要かが分かって来るまでかなりの試行錯誤をくり返した。一年の調査期間はいちおうの調査結果を得るために最少限の長さであった。

悪意でない言い忘れもあり、思い違いもあった。これらのうちある部分は、親子、きょうだい、親戚などから得られたデータや土地事務所の資料などと対照させることによって訂正されたが、おそらく完全なものにはいづらか距離があることであろう。

言葉の問題もあった。クランタン方言は標準マレー語と語り、発音ともにかなり異なっている。正直に言って今回の調査は23才の助手 Wan Junoh に負うところが大きい。彼は筆者の意図をよく察し適切な解説を加えながら調査を手伝ってくれた。

今回の調査には大へん無理をして買った自動車が役に立った。第1に無駄な労力を費やさなくてすむ。長期の調査を精神的・肉体的に容易にする大きな条件である。第2に他の地域をもしばしばおとずれて視野の広い調査をすることが可能になったことである。狭いクランタンの中でさえ、いろいろな生活の違いがあって安易な一般化はきわめて危険なのである。

ともあれ滞在はいちおう終りに近づいている。クランタンの人々に感謝の意を表しつつ、再びこの地をたずねることを念願して、十分文章もまとまらぬままに筆をおく次第である。

(1971年9月)